

廣島鋤花《紀南百景》より

1927(昭和2)～31(昭和6)年頃 和歌山県立近代美術館蔵



動鳴溪



白濱温泉ヲ望



鮎川温泉

今からおよそ90年前、廣島鋤花は和歌山県の北部から、南部の田辺や新宮、三重県の鬼ヶ城に至るまでの広範な地域を、幾度も旅行して写生を重ねました。まだ整備されていなかった当時の険しい道を、主に自転車でめぐり、眼前の光景を描き留めていったこの行程は、和歌山の豊かな自然を全身で感受しながらのものだったと想像されます。このときのスケッチを元に描かれたのが《紀南百景》です。

複数の《紀南百景》が制作されたことが記録から確認できますが、ここに紹介するのは、鋤花が京都で師事していた西山翠嶂の画塾、青甲社の展覧会に出品されたものです。4冊の画帖に収められたうちの3点で、いずれも田辺、白浜の風景を描いたものです。

絵画と出会う「この一点!」

文人画にみる心象風景

会場：田辺市立美術館

会期：2019年10月12日(土)～11月24日(日)

江戸時代の文人画家たちが風景画を描く上で目指した到達点は、「写意」を込めた実景の図、すなわち「真景図」を描くことでした。数多くの画人たちが持てる技法や手法をこらして作品を描きますが、なかでも先人の模倣に重点をおきつつ、それを更に昇華させることに心を砕いたのが野呂介石(1747～1828)でした。

本図は三幅を通して図様が連続する山水図で、一幅でも数幅合わせても鑑賞できることから「離合」と呼ばれます。生前の介石の言葉を弟子がまとめた『介石画話』などには、伊勢の松坂（現在の三重県松阪市）を公務で訪れた際、中国清代に活躍した伊孚九の代表作「離合山水図」を見て感銘を受けた介石が、自らも同じ三幅対の離合山水図を描いたことが記されています。

本図はその作例の一つとみられ、伊孚九の図様に似せてはいるものの単なる模写ではなく、自身がこれまでの研究で得た「山水の描き方」を出来るだけ反映させようとしたことがうかがえる内容となっています。

(主任 辰巳 充)



野呂介石「離合山水図」一八二五(文化二年)

田辺市立美術館蔵

田辺市立美術館へのきもち②

田辺市立美術館近傍の南紀の台の住民となって27年が経過した。住み始めた頃はこの辺りは別荘ばかりだったが、最近は宅地の造成が進み、津波を避けるためもあってか、住人も増えた。この閑静な高台から田辺市立美術館へと巡る散策路がある。小山と谷が次々と交互する山野辺の小道に分け入ると、野生の虫、鳥、草木等の姿や声が四季折々鑑賞できる。ここで、20年前に南紀熊野体験博が盛大に開催され、その後も新庄総合公園として整備されてきた。その中にあって田辺市立美術館はずっと目玉のままである。美術館の周辺には園芸種が色とりどりに独特の姿で咲き誇る花壇があり、心も和む。私はこのような自然と人工が織りなす公園で出逢った虫やナメクジや草花等についての数々の記録を各種雑誌で紹介している。今楽しみにして見守っているのは、公園内の池にマミズクラゲが湧き出てこないかという事である。毎日、公園内を巡る散策路で美術館の傍を通りながら、憩の一時を過ごしている。



クラゲの壁画が描かれている研究所の外観と筆者

私はクラゲの系統分類学の専門家で、昨年までは白浜町に所在する京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所に教員として勤務していた。そこでは水族館を併設していることもあって、多様な海洋生物の研究と教育に勤しんできた。定年退職後は、現在地球上に生きている動物の中で超ウルトラ能力を発揮する、つまり「若返り」を繰り返し起こす、ペニクラゲに関する研究と体験ができる個人研究所を設立した。ここでは、クラゲをスケッチし、対象をよりよく見て知る事から体験研究を始めていただくようにしている。生き物には独特の形態がある。それを会得していただく事で、その生物を知り、親しみを覚え、地球上の全ての命を大切に心が芽生え、多様で平和な生命の星を尊ぶ気持ちが育まれたら幸いと思っている。そして、人類の夢がかかった「若返り」の秘密の解明と応用を究極の目標としている。

この様に自然散策と生物研究が専らの私だが、美術館巡りも人生の重要なひとこまになっている。音楽や映画等もさることながら、何と言っても美術館こそ人の芸術活動を心から鑑賞できるまたとない空間である。田辺市立美術館はいつも空調が適切に効いて居心地良く、ゆったり配置された様々な美術品を心ゆくまで眺められる、まさに幸せの一時…。また、田辺市立美術館では多様な企画展が次々と催されるのも嬉しい。特に自然がテーマになったこれまでの展覧会は、全て有意義に鑑賞させていただいた。先般は「描かれた滝」展が世界遺産登録15周年記念として開催されていた。紀南に多く存在する滝を自身で訪れたときに感じたその場の雰囲気と、美術作品となった両者とを自分なりに比較するのは格別の楽しみであった。写真では現せない絵画の表現はなんととも素晴らしい。今後也多角的な企画を心から楽しみにしている。

(ペニクラゲ再生生物学体験研究所所長 久保田 信)

編集後記

世界遺産登録15周年記念の小松正史さんのコンサートには多くの方々のご来場をいただきありがとうございました。私も素敵な時間を頂きました。10月には新庄公園でコスモまつりが開かれ、11月には恒例となった「関西文化の日」にあわせての観覧料無料と展示解説会を行います。この秋以降も引き続き皆様のご来館をお待ちいたします。(F.O.)

田辺市立美術館 NEWS ORANGE Vol.3I

編集・発行：田辺市立美術館／熊野古道なかへち美術館

発行年月日：令和元年10月1日

田辺市立美術館

〒646-0015 和歌山県田辺市たきない町24-43
TEL.0739-24-3770 FAX.0739-24-3771
http://www.city.tanabe.lg.jp/bijutsukan/

田辺市立美術館分館
熊野古道なかへち美術館

〒646-1402 和歌山県田辺市中辺路町近露891
TEL.0739-65-0390 FAX.0739-65-0393
http://www.city.tanabe.lg.jp/nakahechibijutsukan/

田辺市立美術館NEWS

ORANGE Vol.3I



鍋井克之《円月島(紀州白浜温泉)》 1933(昭和8)年

田辺市立美術館蔵

作品紹介 鍋井克之《円月島(紀州白浜温泉)》

鍋井克之(1888～1969)は生涯にわたって風景画の制作を主とし、油彩画による日本の風景の表現を追求した代表的な画家である。鍋井は現地での制作を徹底し、モチーフを求めて全国各地へおもむいたが、特に好んで描いた風景のひとつが、紀伊半島南部の沿岸部だった。しかし当地を描くようになったのは、決して早くからではなく、鍋井が40歳代の半ばになってからのことである。それまでの鍋井の海景は主に北陸地方の日本海沿岸に取材したものであった。鍋井は随筆の中で白浜に来た当初のことを「汽車は田辺駅迄で、それから是一時間ほどバスに依らなければならなかった」と記している。田辺駅の開業は1932(昭和7)年の11月で、翌年の12月には白浜まで線路が開通しているので、鍋井が当地を訪れた最初は、およそこの一年の間とみてよいだろう。

《円月島(紀州白浜温泉)》の裏面には、鍋井の署名、題名とともに「昭和八年一月」と記されていて、この作品が鍋井の白浜訪問最初期のものであることがうかがえる。鍋井は同じ随筆の中で「初めはこの地方の明るく、白っぽい自然が、今迄になく手馴れないので、パレットがすっかり変るような感じになるのには困ってしまった」とも述べていて、当地の風景が鍋井の表現に作用したことがうかがわれて興味深い。強い明暗のコントラストや荒めの筆触は、そうした苦心の末のものであろうか、この時期の鍋井の作品のなかでは珍しく重厚で力強い画面となっている。

紀南地方を気に入り、大阪から頻繁に当地を訪れるようになり、海岸や港の風景、梅林などを描いて、自身の代表作となるような作品に結実させていった。

(学芸員 三谷 渉)

岸田劉生と東洋の美

今年は洋画家、岸田劉生（きしだ・りゅうせい／1891～1929）が38歳の若さで亡くなってから、ちょうど90年を迎える年となります。生前から毀誉褒貶の定まらない画家でしたが、没後40年を過ぎた1971（昭和46）年に二点の作品が同時に重要文化財に指定され、没後50年の年に東京と京都、二つの国立美術館で大規模な回顧展が開催されて、日本の近代美術史における優れて高い評価は不動のものになったと言えるでしょう。その後も生涯と芸術の詳細にわたる研究と展覧会が重ねられてきました。

岸田は20年間ほどの画業のうちに、自身の表現を次々と変化させ、一つの作風に停滞することがありませんでした。穏やかな風景の描写から出発して、当時最先端だった西洋の表現主義的な傾向に同調した後、今度は時代に背くかのように北欧の古典的な細密描写に接近してゆきました。その写実表現を突きつめてゆく中で、岸田は独自の緊張感と精神性をたたえた画面を生み出します。重要文化財となっている作品の一つ、《道路と土手と堀（通魂・写生）》（1916年／東京国立近代美術館蔵）や、同時期の一連の肖像画、静物画などです。

やがて、長女の麗子が数え年の5歳になった1918（大正7）年から、その麗子をモデルとした制作が主となってゆきます。同時にこの頃から東洋の古美術や古典芸能への関心が高まり、表現にもまた変化が現れます。



《支那服を着た妹照子像》 1921（大正10）年
ひろしま美術館蔵

岸田の美意識の移行は、この「麗子像」の変容からよく伝わります。東洋の美に目覚めた岸田は、「写実以上の処」を求めようになり、「或る処で写実を欠如させ、その欠如を写実以上の深い美によって埋めればいいのである」と述べます。その実践が、神秘的でミステリアスな雰囲気をもった麗子の肖像の制作でした。

また岸田は1920（大正9）年頃から、

実際に日本画を描くことも始め、その作品を展覧会で発表するようにもなります。岸田の日本画には、中国宋元時代の絵画に倣った繊細な描写のものと、おおらかな筆致で詩書画が一体となって表現される文人画風のものがあります。それぞれに岸田の個性が発揮されていて、晩年は、こうした日本画を描くことの方が主となってゆきました。少ない油彩画の制作においても、そこに東洋の美の表現をなすべく格闘していた姿がうかがえます。

最晩年の岸田は、ヨーロッパにおもむいて自分の築いた表現を問うことを決意していましたが、それはかなうことなく、資金調達のために渡った中国での制作からの帰路、山口県徳山で病によって道半ばの生涯を閉じました。

この岸田の芸術を、「写実から、写意へ」の変遷と捉えて振返る展覧会を、今年から来年にかけて、当館を含む全国四つの美術館で開催します。

（学芸員 三谷 渉）



《菊慈童》 1926（大正15）年
笠間日動美術館蔵

INFORMATION

岸田劉生展 ～写実から、写意へ～

会場／田辺市立美術館（展示室1～5）
会期／2020年2月1日（土）～3月22日（日）
観覧料／600円（480円）
学生及び18歳未満の方は無料
※（ ）内は20名様以上の団体割引料金です。
開館時間／午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休館日／毎週月曜日（ただし2月24日は開館）
2月12日（水）・2月25日（火）

REPORT 「現代の織Ⅳ 草間喆雄」展 アーティストトーク



当館は、現代的な織の造形を展開している日本の代表的な作家をシリーズで紹介してゆく特別展、『現代の織』を一昨年から主催しています。その4回目となる、草間喆雄（1946～ ）の制作を特集する展覧会を、今年の4月から6月にかけて、熊野古道なかへち美術館で開催しました。1970年代の初めからアメリカに渡って、織の立体的な造形に取り組んできた草間の、1990年代から最新の作品まで17点を一同に展覧する内容でした。

会期中に二回のアーティストトークを催して、作家自身から作品や創作についての話をうかがう機会をもちました。アメリカ留学時代からの初期の作品や、建築と一体になった作品の制作など、今回の展覧会で伝えきれなかった部分について、最初に別室で写真を投影して説明が行われ、その後展示室に移って、1点ずつ参加者とともに見てゆきました。

用いられている技法や素材、作品の構造などとともに、表現の着想からねらいとしたことなどについても直接話を聞くことができ、大勢の参加いただいた方々とともに、たいへん有意義な時間を持つことができました。

（学芸員 三谷 渉）

近年の作品について説明する草間喆雄さん

廣島鋤花（鋤和）の日本画

当館では、近代に紀南地方の出身者で画家として活動した人物の軌跡を確認し、当時の当地の美術の動向と日本の近代美術史との関係を位置づけて紹介する展覧会シリーズ、『近代紀南の画家』を昨年度から開始しています。初回は日本画と洋画、双方の領域にまたがって活動した楠本秀男（1888～1961）について振り返りました。

今年度は、1890（明治23）年に現在の田辺市栄町に生まれ、1981（昭和56）年に91歳で亡くなるまで、日本画と生け花の創作を精力的に行い、当地の文化活動の発展を支えた、廣島鋤花（本名は幾太郎、1955年から鋤和に改号）を取り上げます。

鋤花は、幼少の頃から華道を教授していた父、廣島義甫（本名は岩吉）に花と絵の指導を受け、後に大阪の北野恒富、京都の西山翠嶂に師事して日本画を学びました。特に翠嶂のもとでは、1921（大正10）年の画塾「青甲社」の創立にも参加し、およそ15年間に亘って研鑽を積んでいます。

鋤花は、1927（昭和2）年から1929（昭和4）年にかけて、和歌山の各地を写生してまわり、そのスケッチをもとに《紀南百景》を制作しました。1929（昭和4）年の昭和天皇和歌山行幸の折には、そのうちの二十五景が一冊の画帖にまとめられて献上されています。また、1931（昭和6）年の青甲社展に《紀南百景》を出品した際には、特別に一室がその展示にあてられるなど、この作品は鋤花の画業を代表するものの一つとなっています。青甲社展に出品された《紀南百景》は、現在和歌山県立近代美術館に収蔵されています。そのうちから田辺、白浜を描いた3点の作品と現地の紹介を、今号の折込みに掲載しましたので、そちらもご参照ください。

華道家としても、鋤花は1917（大正6）年に亡くなった父を継承して師匠となり、1927（昭和2）年に独自の「盆景花」を創案して、広円流を発足させています。1930（昭和5）年には、和歌山写生旅行の際に感じた景色を取り入れた生け花を発表して、華道界に新風を吹きこみました。

1945（昭和20）年に帰郷してからは、広円流家元としての活動が主になりましたが、日本画の筆も取り続け、田辺市や白浜町の寺院への揮

毫も行っています。

1976（昭和51）年に開かれた米寿の記念展では、過去のスケッチを元にして新たに《紀南百景》を制作して発表するなど、最晩年まで意欲的な作画活動が続けられました。

鋤花は、日本画と生け花、双方の創作から自らの表現を高めていった作家ですが、今回の展覧会では、「鋤和」に改号する前、日本画家としての活動が盛んだった「鋤花」の時代の作品を主にして展覧します。同時代の画家たちとの交流などもうかがいながら、本展覧会を通じて、当地近代の美術活動の様相を探ることを深化させてゆきたいと思います。

（学芸員 知野 季里穂）

INFORMATION

近代紀南の画家Ⅱ 廣島鋤花

会場／田辺市立美術館（展示室1・2）
会期／2019年12月7日（土）～2020年1月19日（日）
観覧料／260円（200円）
学生及び18歳未満の方は無料
（ ）内は20名様以上の団体割引料金です。
開館時間／午前10時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休館日／毎週月曜日（ただし1月13日は開館）
12月28日～1月4日・1月14日
※展示室3・4・5では「原勝四郎と紀南の画家」を開催します



聖福寺（白浜町）の襖絵を描く晩年の廣島

REPORT 「描かれた滝」展 世界遺産登録15周年記念コンサート

今年の7月から9月にかけて開催した「描かれた滝」展は、「紀伊山地の霊場と参詣道」がユネスコの世界遺産に登録されて15周年を迎えることを記念した展覧会でした。会期中に、京都精華大学教授で作曲家の小松正史さんを招いてのコンサートを開催しました。

小松さんは、昨年の3月に図書館と共催した連続講座、「森と芸術」の「音楽」の部門の講師としてお越しいただいたことがきっかけで、当地の環境と音のフィールドワークを行い、その成果から『熊野古道組曲』を作曲して、CDアルバムをリリースしています。

閉館後の田辺市立美術館のエントランスホールを会場にし、『熊野古道組曲』の演奏をメインに、参加者とともに行う聴覚のトレーニング「耳トレ」や、これまでに作曲してきた環境音楽の演奏もしていただいて、たいへん充実した内容となりました。

当地で生まれた音楽を、その地で聴くというまたとない時間は、世界遺産登録15周年の記念にふさわしいものでした。

（学芸員 知野 季里穂）



フィールドワーク時の写真を投影しながら演奏する小松正史さん

観覧料の改定について

田辺市立美術館条例の改正、施行にともない、2019年10月1日から、館蔵品展の観覧料が下記のように変わります。ご理解をお願いいたします。

改定前:250円 → 改定後:260円

※20名様以上の団体割引料金、200円に変更はありません。18歳未満及び学生の方はこれまで通り無料です。

※小企画展の観覧料もこれに準じます。

廣島鋤花《紀南百景》の地を訪ねて

2019（令和元）年9月



田辺市稲成町に、ひき岩群と呼ばれる岩肌が露出した巨大な岩山群があります。その東側に、現在では土砂で埋まって、かつての面影はありませんが、轟音を立てて流れる溪流がありました。鋤花はその溪流越しに岩山群を写生したと思われます。（写真はため池越しに岩山を見たものです）



鋤花は高台にある平草原から白浜温泉街を見下ろして写生しています。ホテルや住宅が増えて、当時の景観から随分と変化していますが、奥に小さく見える、中央の海蝕洞が特徴的な円月島の姿は変わらず、現在も白浜町のシンボルとして親しまれています。



田辺市大塔村の鮎川沿いを、鋤花は山手に向かって写生しています。現在は休業していますが、黄金の湯として長年親しまれた、鮎川温泉の看板が道路の左手に見えます。新しい道路も作られて、温泉周囲の地形は変わってしまいましたが、遠くの上並みは鋤花が訪れたときと同じです。